

第2章 常盤構内国際交流会館新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

常盤構内の東端部、学生寮の東側の駐車場に国際交流会館の新営が計画された。埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館では平成7年5月23日から5月30日まで試掘調査を行っている。以下に調査の概要を示す。

試掘調査では、A～Dの4つのトレンチを設定して基本層序を確認した。第Ⅰ層：表土、第Ⅱ層：造成土、第Ⅲ層：耕作土または客土、第Ⅳ層以下が地山となる。第Ⅳ層：茶褐色粘質土、第Ⅴ層：黄橙色砂質土・橙褐色粘質土、第Ⅵ層：黄橙褐色砂質土、第Ⅶ層：黄褐色粘土、第Ⅷ層：暗赤褐色粘質土・黄橙褐色粘質土、第Ⅸ層：黒色・暗赤褐色・黄橙褐色が縞状を呈する岩盤となる。第Ⅷ層は岩盤風化土、第Ⅸ層は軟化した岩盤であるが、第Ⅳ～第Ⅶ層は火山灰土、もしくはその二次堆積層と考えられた。

常盤構内の東方約300mにある常盤池の周囲は、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物が濃密に分布しており、常盤池遺跡として知られている。常盤池は、浸食作用により先端部が樹状になった低丘陵が、せめぎ合うように張り出すことで形成された、小規模の谷地形の、狭まった出口を堰止めて作られた灌漑用水池である。およそ8.5kmの池の周囲から発見される遺物は、池の汀線際で多く採集されているようで、これは水の作用により遺物包含層の一部が洗い出されているためと考えられている。そして、この包含層は、水面下も含めた丘陵平坦部に広がっていることが推定されている¹⁾。

常盤構内は、常盤池遺跡B地点¹⁾が立地している低丘陵を東に派生する丘陵本体の頂部平坦地に位置する。しかも、常盤構内の北側には東から西に開ける谷が入り込んでおり、新営予定地はこの谷へ向かう丘陵縁辺にあたる。新営予定地のこのような立地には、常盤池遺跡の遺物包含層の所在推定場所との類似性がみられる。このため、試掘調査で確認した火山灰関連の土層と推定される第Ⅳ～第Ⅶ層は、遺物を包含してい

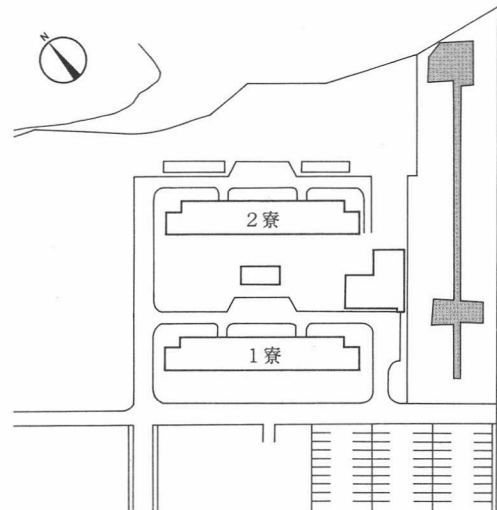


Fig.4 調査区位置図

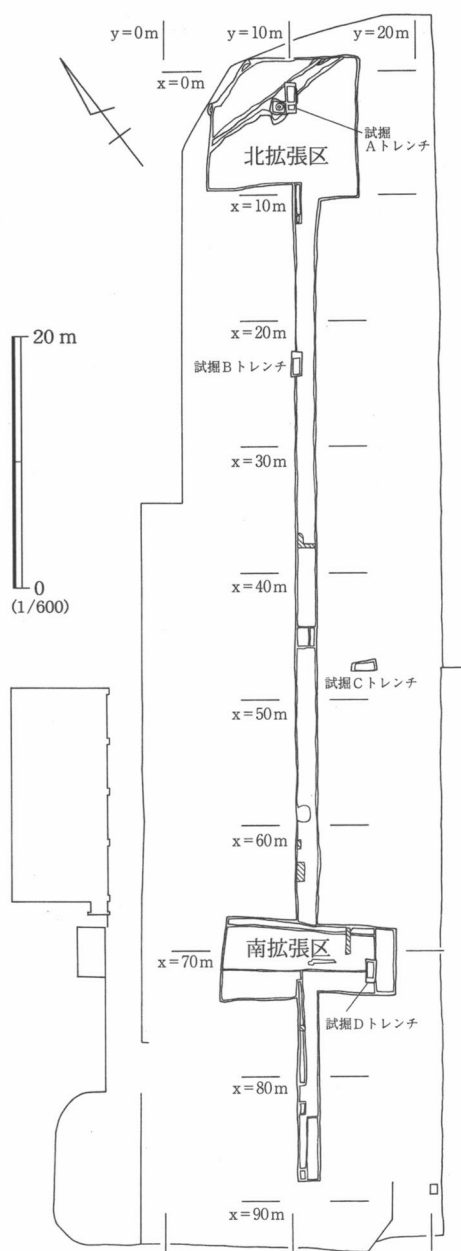


Fig.5 調査区設定位置図

地の北端に任意の点を設定しこれを基準点 ($x = 0 \text{ m}$, $y = 10 \text{ m}$) とし、ここで x 軸に直交する軸を y 軸とした。平面位置は、基準点からの x 軸方向及び y 軸方向への移動距離によって表示する。基本調査区は、北西辺を x 軸から南東方向に50cmほど離して設定した。

る可能性が推察された。また、近接する畑地より姫島産黒曜石製の石鏃脚部が採集されたことが、この可能性をさらに強めるものとして捉えられた。このようなことから、埋蔵文化財資料館運営委員会において、試掘調査トレンチでは遺構及び遺物を検出することはできなかったものの、新営予定地に旧石器時代を中心とした遺物包含層の所在を確認するため、新営工事に際して事前の発掘調査が必要であるとの判断がなされた。

平成8年度に予算措置がなされるに至って工事計画が具体化した。これを受けて、埋蔵文化財資料館では、平成8年5月13日から6月13日、7月1日から7月31日の2期間、約2カ月にわたる発掘調査を実施した。調査では、工事用地に幅2m、長さ90mの南北方向基本調査区を設定し、さらにこの基本調査区の北端と南半の2ヶ所で東西両側に張り出すように北拡張区及び南拡張区を設定した。北拡張区は東西12m、南北11.4m、南拡張区は東西13.8m、南北6mで、基本調査区と合わせた調査総面積は352㎡となった。

調査に際しては、左図に示すように任意の座標点を設定した。設定方法は以下の通りである。まず、新営予定地を東西にほぼ2等分する直線を定めこれを南北方向の基準軸すなわち x 軸とした。次に、 x 軸上にあつて予定

2 基本層序 (Fig.6 ~ 9, 11・12, PL.3 (1) (2)・4(1))

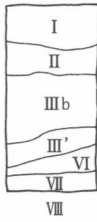
第Ⅰ層：表土	第Ⅱ層：造成土
第Ⅲ層：畑耕土	第Ⅳ層以下：地山

新営予定地は調査直前まで非舗装バラス敷の駐車場として利用されていた。また、これ以前はこの地には旧職員宿舎が建っていた。このため、基本層序の第Ⅰ・第Ⅱ層はこれらを反映した土層となっている。第Ⅰ層はマサ土及びバラスによる表土である。第Ⅱ層は造成土で、これには最初の土地造成によるもの、職員宿舎建設の際のもの、職員宿舎取り壊しの際のもの、駐車場整備の際のものがみられる。攪乱土の多くは職員宿舎建設の際の掘削によるものである。第Ⅲ層は畑耕土と考えられるが、基本調査区北西壁土層でみると北東端の $x = 2\text{m}$ 付近以北と南西端の $x = 84\text{m}$ 以南でみられるだけである。北東端での堆積は厚い。南拡張区北東壁土層で見ると $y = 13\text{m}$ より東側で比較的安定してみられる。試掘Aトレンチの第Ⅲ'層は畑開墾の際の客土と推定される。第Ⅳ層は茶褐色系統の砂質土と粘質土である。第Ⅳ層は、上層の影響で大きく変質しているようなところが多く、このような場所では漸移層的な性格の強い土層となっている。第Ⅴ層は、橙色または黄色ないし褐色系統の粘質土と砂質土である。第Ⅵ層は、白色砂を含む黄橙褐色砂質土で固く締まっている。岩盤及び岩盤風化土の上に堆積した基盤堆積土と考えられる。第Ⅶ層は黄褐色粘土だが、事前調査の調査区では全く見ることができず、試掘Aトレンチだけでみられる薄い土層であることから、第Ⅷ層と同一層と判断する。試掘調査時にトレンチにたまった雨水の影響で土色に変化したと思われる。第Ⅷ層は、暗赤褐色粘質土の岩盤風化土である。第Ⅸ層は、黄色・橙色・赤褐色または黒色・暗赤褐色が縞状を呈する。おそらくは蛇紋岩の風化岩盤である。

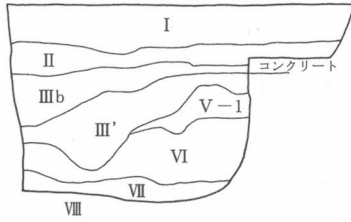
調査区内での地山堆積状況を概観する。第Ⅵ層は、基本調査区のほぼ全域で確認できるが、検出面の深さに特徴がある。基本調査区 $x = 5 \sim 61\text{m}$ の区間では第Ⅵ層の検出位置は現地表下約20~40cmと比較的浅く、第Ⅰ・第Ⅱ層の下がすぐに第Ⅵ層となる。ところが第Ⅵ層は $x = 61\text{m}$ あたりで南に落ち込んでいるようで、検出位置が急に深くなる。また、南拡張区北東壁土層で見ると、第Ⅵ層の上面は東に向かってなだらかに深くなって行く様子がわかる。そして、このように第Ⅵ層が深くなったようなところでは、第Ⅳ・第Ⅴ層の堆積を見ることができるのである。

今回の事前調査では、原則として基盤堆積土と考えている第Ⅵ層上面を検出したところで、掘り下げを停止している。このため、第Ⅵ層より下の土層は、調査区の一部で確認し

Aトレンチ
北東壁
33.5m



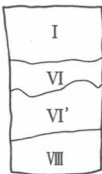
南東壁
33.5m



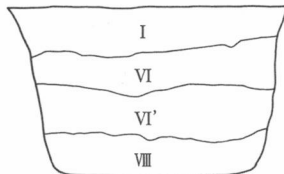
Aトレンチ土層

- I 表土 明黄褐色砂質土 (マサ土、バラス混)
- II 造成土 黄褐色粘質土
- IIIb 耕作土 灰黄色粘質土
- III' 客土 茶褐色粘質土
- V-1 地山 黄橙色砂質土
- VI 地山 黄橙褐色砂質土 (白砂混)
- VII 地山 黄褐色粘土
- VIII 地山 暗赤褐色粘質土 (岩盤風化土)

Bトレンチ
北東壁
33.5m



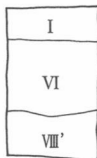
南東壁
33.5m



Bトレンチ土層

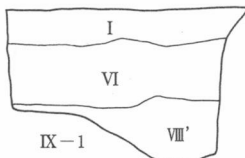
- I 表土 明黄褐色砂質土 (マサ土、バラス混)
- VI 地山 黄橙褐色砂質土 (白砂混)
- VI' 地山 黄橙褐色砂質土 (白砂混、小礫を多く含む)
- VIII 地山 暗赤褐色粘質土 (岩盤風化土)

Cトレンチ
北西壁
33.5m



IX-1

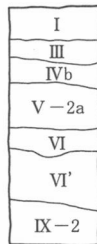
南西壁
33.5m



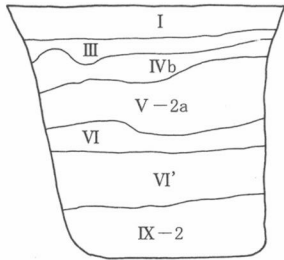
Cトレンチ土層

- I 表土 明黄褐色砂質土 (マサ土、バラス混)
- VI 地山 黄橙褐色砂質土 (白砂混)
- VIII' 地山 黄橙褐色粘質土 (岩盤風化土)
- IX-1 地山 黒色・暗赤褐色岩盤

Dトレンチ
南西壁
33.5m



北西壁
33.5m



Dトレンチ土層

- I 表土 明黄褐色砂質土 (マサ土)
- III 耕作土 灰黄色粘質土
- IVb 地山 茶褐色粘質土
- V-2a 地山 橙褐色粘質土
- VI 地山 黄橙褐色砂質土 (白砂混)
- VI' 地山 黄橙褐色砂質土 (白砂混、小礫を多く含む)
- IX-2 地山 黄橙褐色岩盤 (黄・橙・赤褐色が縞状に配置)



Fig.6 試掘調査A~Dトレンチ土層断面図

基本層序

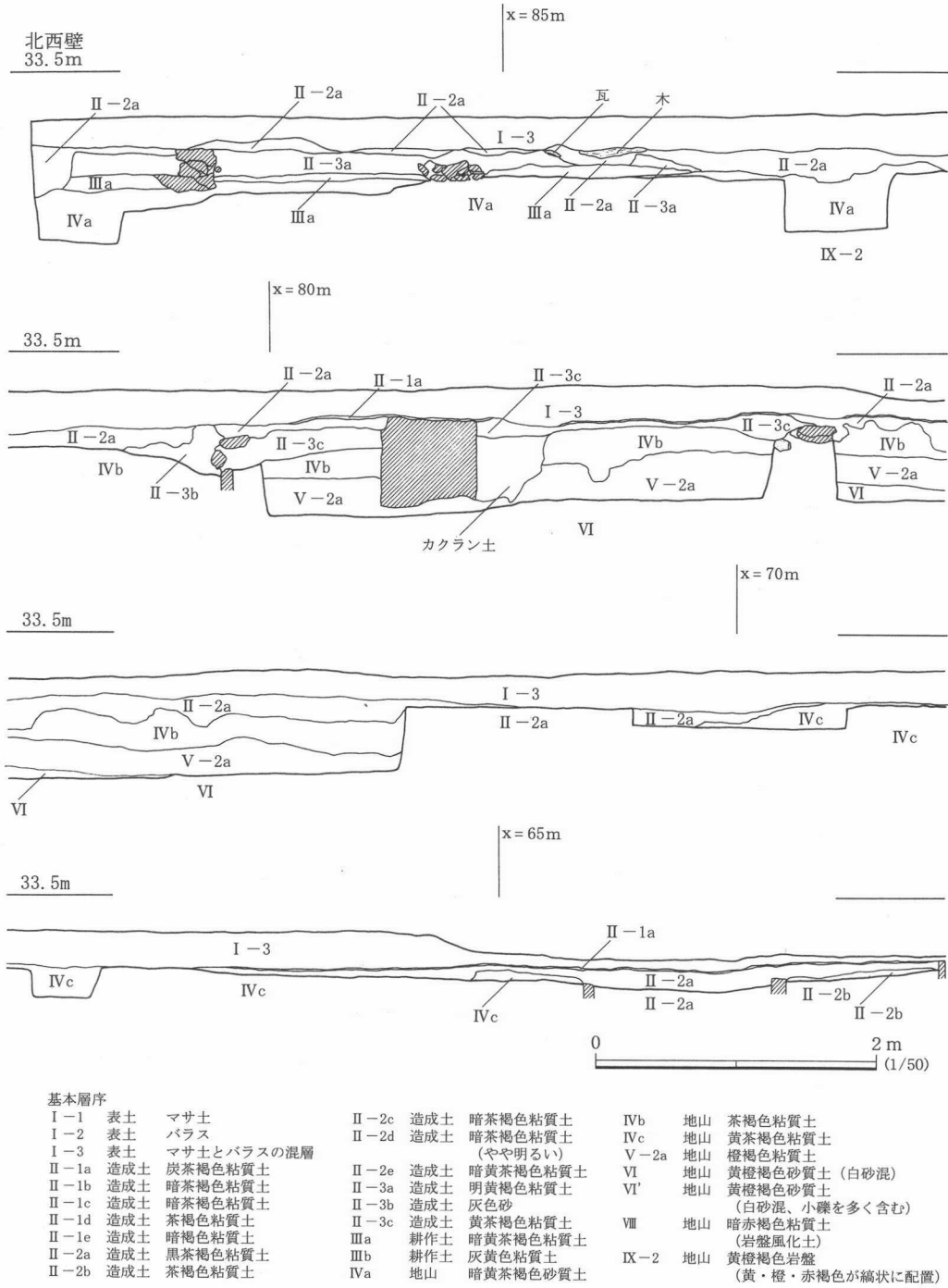
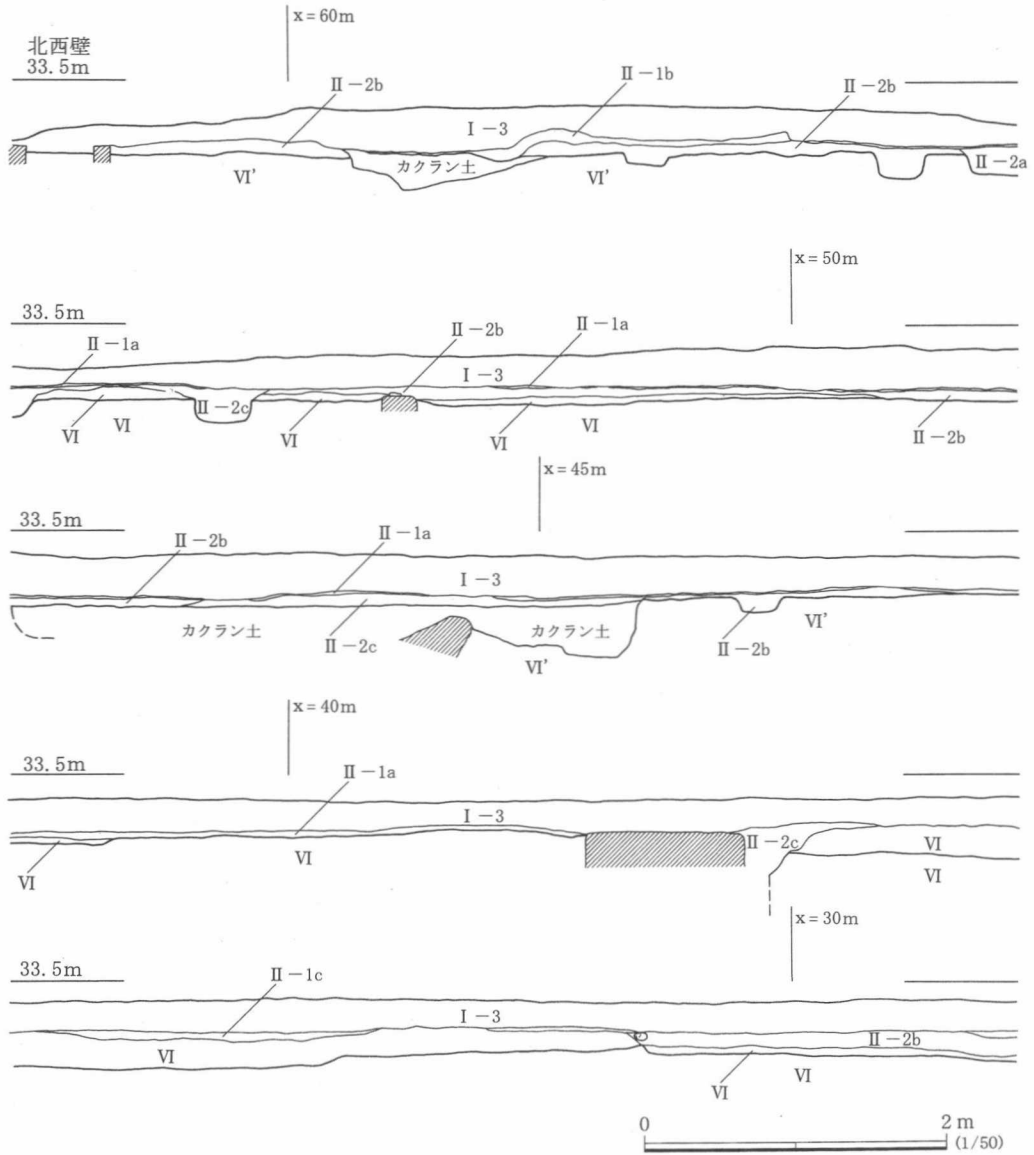


Fig.7 調査区北西壁土層断面図①

常盤構内国際交流会館新営に伴う発掘調査



基本層序

I-1	表土	マサ土	II-2c	造成土	暗茶褐色粘質土	IVb	地山	茶褐色粘質土
I-2	表土	バラス	II-2d	造成土	暗茶褐色粘質土	IVc	地山	黄茶褐色粘質土
I-3	表土	マサ土とバラスの混層	II-2e	造成土	暗黄茶褐色粘質土	V-2a	地山	橙褐色粘質土
II-1a	造成土	炭茶褐色粘質土	II-3a	造成土	明黄褐色粘質土	VI	地山	黄橙褐色砂質土 (白砂混)
II-1b	造成土	暗茶褐色粘質土	II-3b	造成土	灰色砂	VI'	地山	黄橙褐色砂質土
II-1c	造成土	暗茶褐色粘質土	II-3c	造成土	黄茶褐色粘質土			(白砂混、小礫を多く含む)
II-1d	造成土	茶褐色粘質土	IIIa	耕作土	暗黄茶褐色粘質土	VIII	地山	暗赤褐色粘質土
II-1e	造成土	暗褐色粘質土	IIIb	耕作土	灰黄色粘質土			(岩盤風化土)
II-2a	造成土	黒茶褐色粘質土	IVa	地山	暗黄茶褐色砂質土	IX-2	地山	黄橙褐色岩盤
II-2b	造成土	茶褐色粘質土						(黄・橙・赤褐色が縞状に配置)

Fig.8 調査区北西壁土層断面図②

基本層序

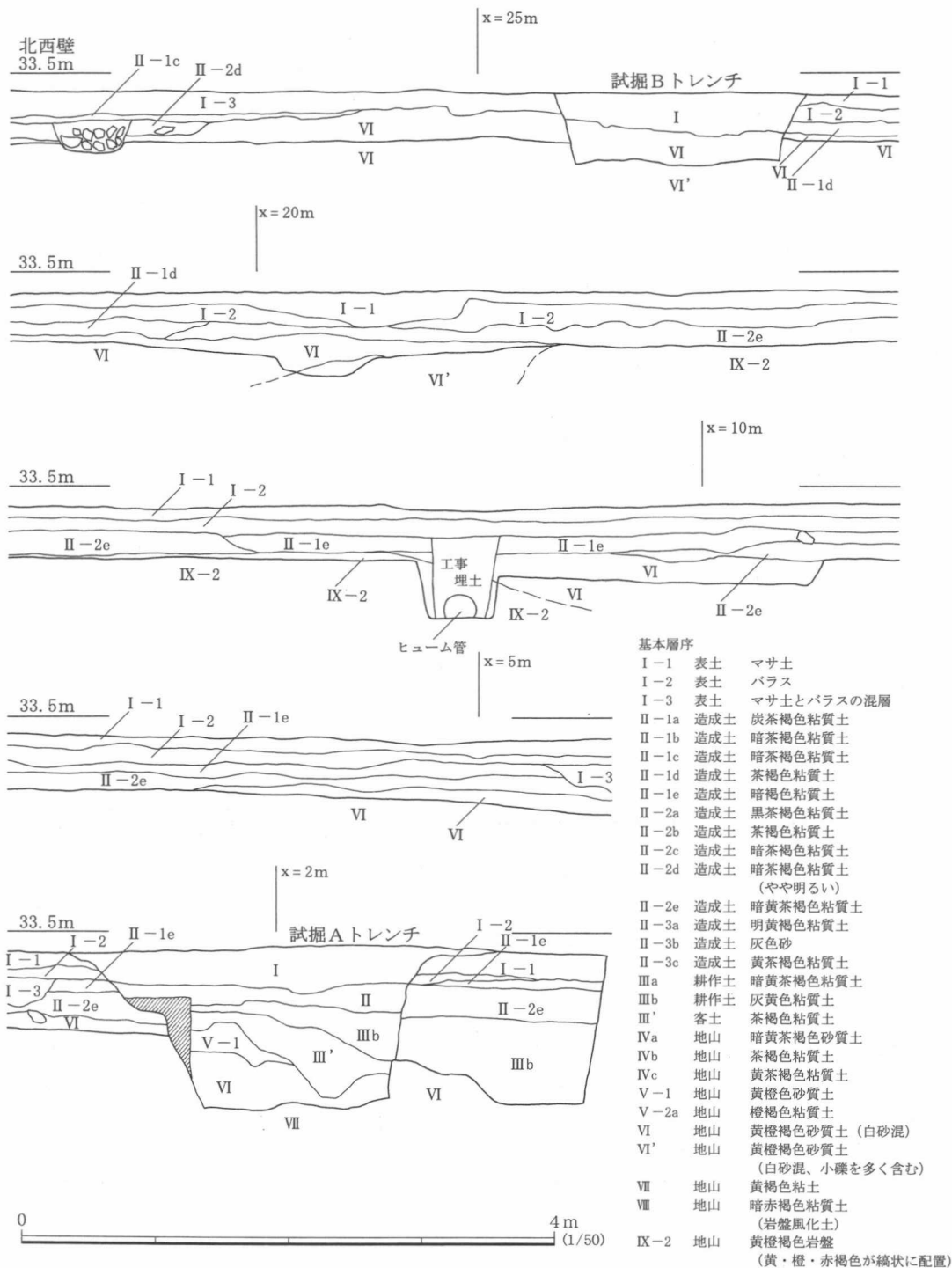


Fig.9 調査区北西壁土層断面図③

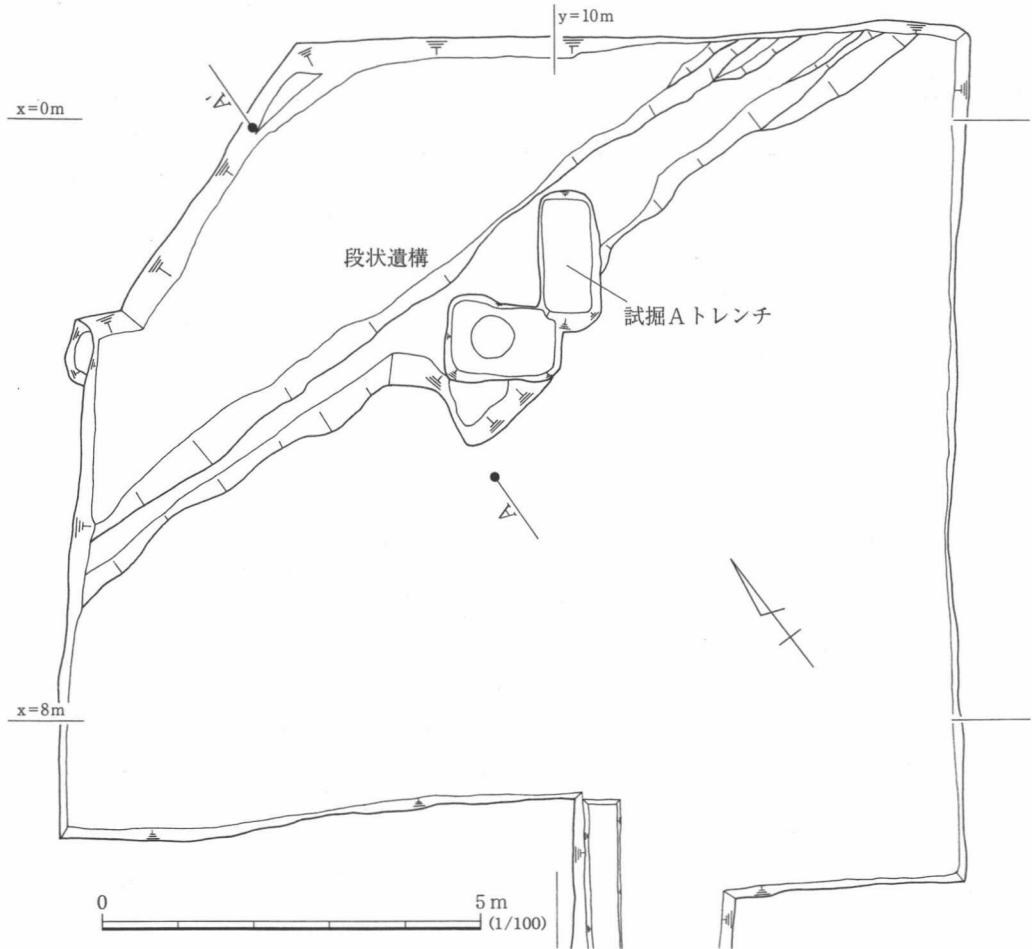


Fig.10 北拡張区遺構配置図

ているだけである。第Ⅷ層は、第Ⅵ層以下を調査している試掘A～Cトレンチと北拡張区段状遺構の遺構底面で確認した。第Ⅸ層は、基本調査区 $x = 12.5 \sim 17.5m$ の区間、基本調査区 $x = 82.5m$ 付近の土層確認用のサブトレンチ、試掘C・Dトレンチで確認している。基本調査区 $x = 12.5 \sim 17.5m$ の約5mの区間では、第Ⅵ層の検出面と同じ現地表下約40cmの深さで検出した。この付近は岩盤が隆起していたと考えられる。第Ⅸ層は、基本調査区 $x = 12.5 \sim 17.5m$ の以北については、試掘Aトレンチでは確認できないことから、急激に落ち込み第Ⅵ層との間にⅧ層を形成すると考えられる。以南については、第Ⅸ層が $x = 82.5m$ 付近で確認されていることから、上下しながらも次第に深くなっていくと推定できる。

以上にみられるような第Ⅵ層の検出位置、あるいは第Ⅸ層の確認状況から調査区周辺の

基本層序

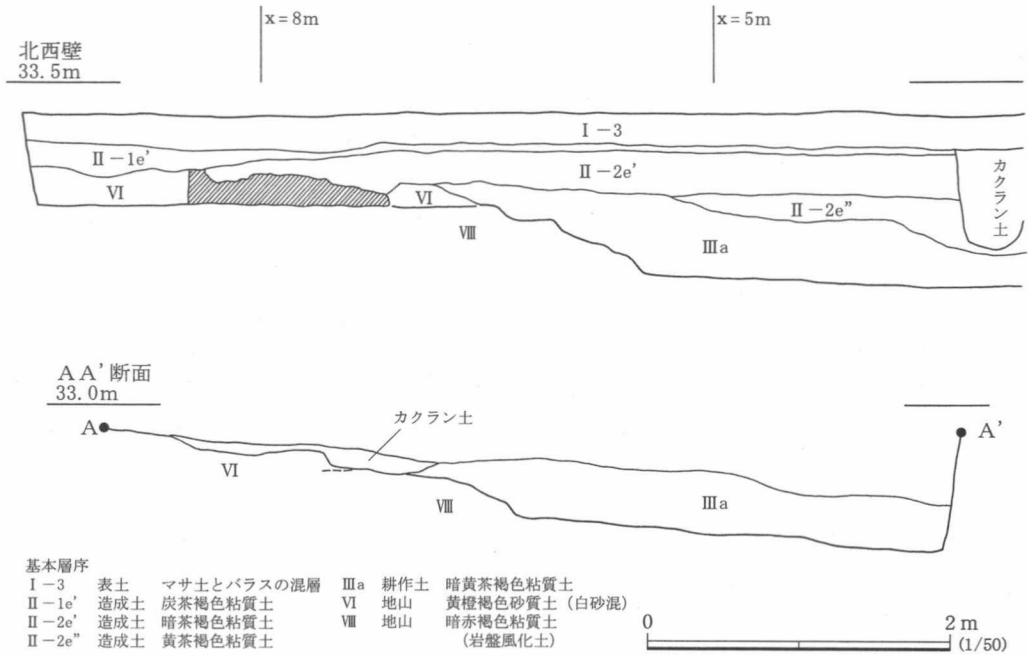


Fig.11 北拡張区土層断面図

旧来の地形を復元してみよう。南北方向については、岩盤が隆起していたと考えられる $x = 12.5 \sim 17.5$ mあたりが最も高く、南に行くにしたがい、なだらかに下降していたと考えられる。また、最高所から北にかけては、やや急峻に落ち込んでいたと考えられる。東西方向については、西に高く東かけてなだらかに下降していたと考えられる。このように、調査区周辺は、北に谷を控え、南と東になだらかに下降する丘陵状地形を呈していたと考えられるのである。

ところで、上記のように復元できる旧来のこの丘陵では、本来は広い範囲で第VI層の上に第V・第IV層が堆積していたと考えられる。ところが、後世の畑の開墾によって北側部分では第VI層はもとより第VIII層に至る掘り込みがなされたことがわかる。さらにその後、丘陵頂部を平坦にカットする大規模な造成工事が行われたために、最高所付近では第IV・第V層までもが完全に消滅し、一部では第IX層がむき出しとなった。また、南側部分でも削平が第VI層に到達したところもあった。この結果、第IV・第V層は、もともとの丘陵が低くなっていた南半に残るのみとなってしまったと解釈することができよう。第III層も同様にこの造成で大部分を削平された。このような状態の上に第II・第I層が形成されたのが調査時における新営予定地の状態であろう。

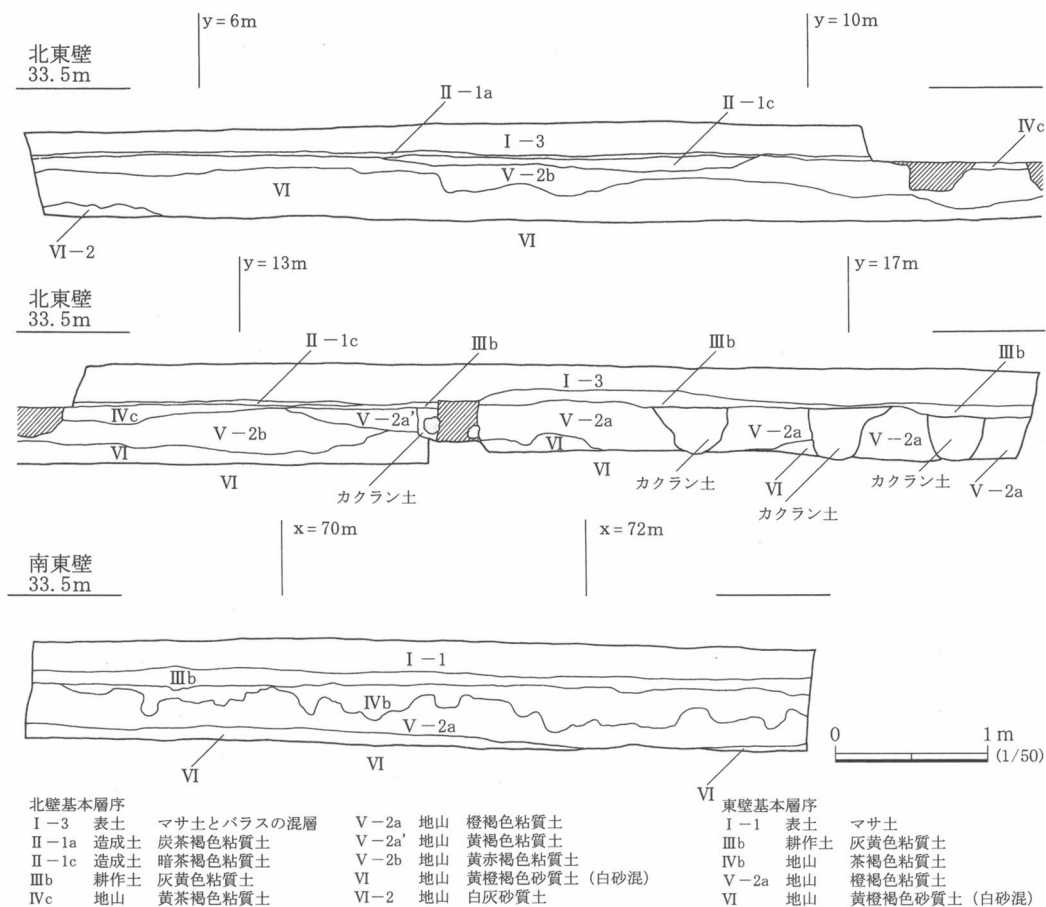


Fig.12 南拡張区土層断面図

3 遺構 (Fig.10・11, PL.2 (2)・3 (1) (2))

調査区の最北部、北拡張区北半で段状遺構を検出した。遺構検出面は調査区西寄り第Ⅷ層上面、調査区中央部から東にかけては第Ⅵ層上面である。この遺構は、本来は第Ⅵ層以上から掘り込まれており、これは北拡張区北西壁土層で見ても明らかである。調査区西寄り第Ⅷ層上面が検出面となったのは、造成のために第Ⅵ層が安定していなかったからである。遺構は、検出長13mで調査区を東西に横断しており、ほぼ東西の方位に沿っているようである。北に向かって下降する2段の段を持ち、上段平坦部の幅は約30～60cm、下段の平坦部は検出しているだけで幅約2.8mを測り、調査区外にさらに延びている。削平されている第Ⅵ層上面と上段の比高は北拡張区北西壁及びAA'断面でもみられるように約30～60cmである。上段と下段の比高は同様に約50～80cmである。調査区北東壁付

近では、検出面と上段の間、上段と下段それぞれに幅約 20 cm の小段がみられる。この遺構の性格は、埋土が第Ⅲ a 層すなわち畑耕土であることから、畑を開墾した際の地山の削り込みと考えられるが、段状を呈することの理由が不明である。また、第Ⅲ a 層と第Ⅵ・第Ⅷ層は、土色・土質から見て大きな隔たりがあることから、第Ⅲ a 層は他所から客土された可能性が高いと考える。

4 遺物 (Fig.13, PL.4 (2))

今回の調査で出土した遺物は極めて少量で、期待した地山からの遺物の出土はみられなかった。第Ⅰ・第Ⅱ層からは、少量の陶磁器片が出土しているが小片で図示し得ない。第Ⅲ層からは注目すべき遺物として水晶製の石器が 2 点出土した。

1 は、北拡張区第Ⅲ a 層中より出土した調整加工・使用痕のある剥片である。水晶の六角錐状を呈する結晶の頂部を取り込んだ剥片で、これを尖頭部として利用している。左側縁部上半と基部右半に主要剥離面側からの調整剥離痕が、右側縁部上半に剥離痕がみられる。左側縁部上半の調整剥離痕は素材の主要剥離面に対して角度が大きく、ブランディング加工に近い調整がなされたようである。基部右半の調整剥離痕は大きさ、角度ともに大きく、素材にノッチを加えることを目的とした可能性がある。これらに対して、右側縁部上半の剥離痕は大きさが小さく横長で、剥離痕相互の重複も多く衝撃剥離痕の可能性が高い。

2 は、南拡張区南東部第Ⅲ b 層から出土した二側縁加工のナイフ形石器である。先端部が欠損しているが、左側縁下部及び右側縁部に主要剥離面側からの調整剥離痕がみられる。右側縁部の剥離痕は剥離方向に素材に沿って回り込んでおり、素材を挟り込むような一般的なブランディングに比べるとやや違和感を覚える。このため、石鏃あるいはその未完成品である可能性を検討したが、左右両側縁部ともに調整剥離痕が素材の片面に偏在していること、右側縁部とは異なり、左側縁部の調整剥離痕は主要剥離面との角度が大きいこと、石鏃としては素材の厚みが大きいことから判断してナイフ形石器としておく。先端部を欠損してはいるのだが、現存長 1.9cm、幅 1.0cm と小さく、欠損部を復元しても全長 2.3cm

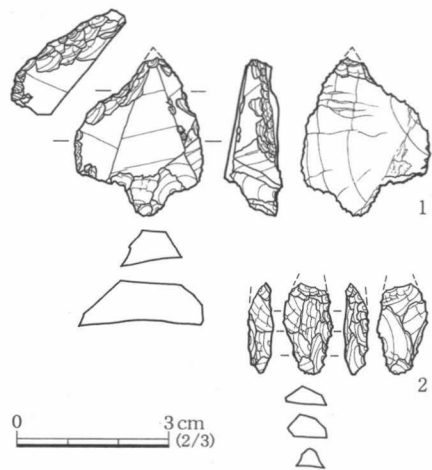


Fig.13 出土石器実測図

までであろう。宇部台地に広くみられる小型ナイフ形石器の一群に属すと考えられる。出土位置が、第Ⅴ-2a層との境に近い第Ⅲb層下部であったため、これが仮に第Ⅴ-2a層に属すならば、遺物包含層の認定につながることから、遺物を取り上げた後にも土層の微妙な起伏に注意して再度慎重に調査したが、第Ⅴ-2a層からの出土とは認定できなかった。

5 小結

今回の調査は、調査面積、調査期間ともに常盤構内では過去最大であり、常盤構内で実施したはじめての本格的な発掘調査となった。埋蔵文化財資料館では、昭和58年以降常盤構内の発掘調査を行ってきた。しかし、常盤構内では、これまで主要な施設整備が行われてきた構内南西部から中央部にかけては、旧来の地形が大きく削平されていると推定される場所であったため、調査の規模も小さくならざるを得なかったのである。今回の調査地は、常盤構内の縁辺部にあたっているため、構内中央部に比べると削平の規模が小さいことが期待された。結果的には、構内中央部に比べると削平規模は小さいものの、それでも削平は地山層のかなりの部分に及んでいることが判明した。このようなことから、今回は北拡張区で段状遺構を検出した以外には、南北基本調査区、南拡張区ともに、旧職員宿舎に係わる基礎などの他には遺構を検出することができなかったのは残念である。

今回の調査の成果は、調査地の土層堆積状況を確認し旧来の地形の復元をしたこと、北拡張区で段状遺構を検出したこと、本来の文化層から遊離してはいるが旧石器時代のものと考えられる遺物が出土したことである。特に、南拡張区から出土した小型ナイフ形石器は、常盤構内に後期旧石器時代の文化層の所在する可能性を示し、また近接する常盤池遺跡との関連性をも示唆するもので発見の意義は大きい。今回の調査で推定した調査地周辺の旧地形と重ね合わせて、今後の常盤構内における発掘調査の指針となるものである。

(村田)

[注]

- 1) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡 (8)・(9) - 常盤池遺跡 その (1)・(2) -」『古代文化』第41巻第1・3号、(財)古代学協会、1989年

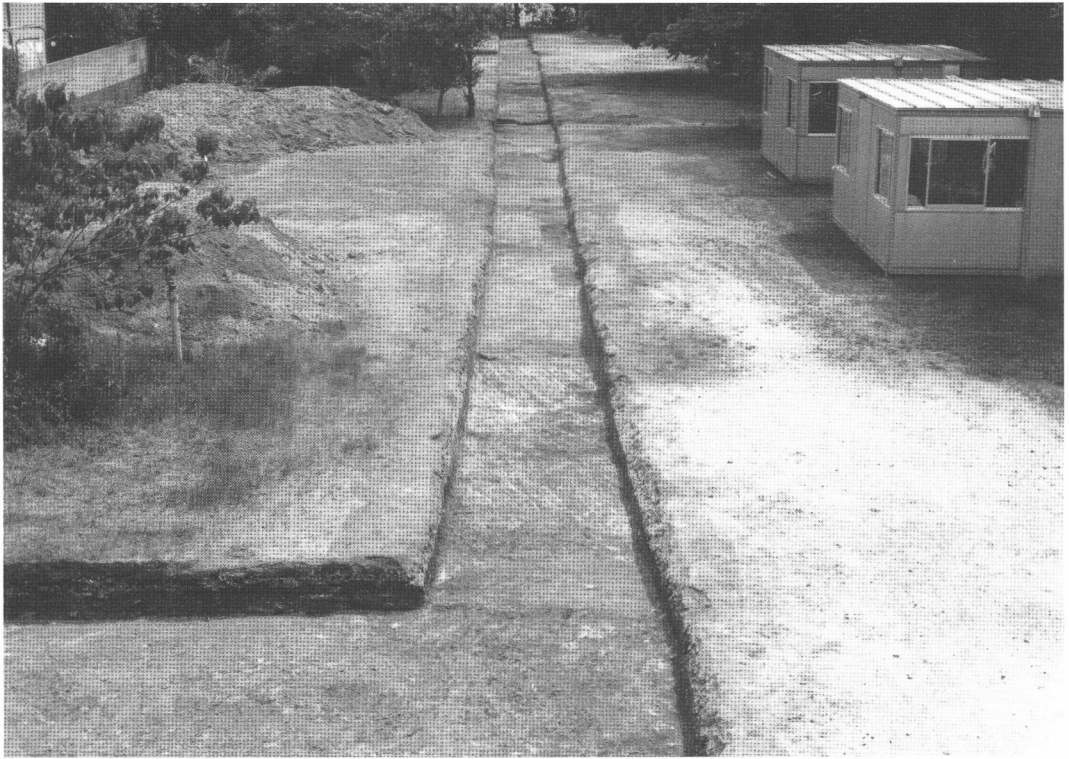
Tab.2 出土遺物観察表 (石器)

法量 () は現存値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	北拡張区	Ⅲa層	調整加工・使用痕のある剥片	(32)	2.6	1.1	8.1	水晶	先端部欠損・先端部衝撃剥離痕あり
2	南拡張区南東部	Ⅲb層下部	ナイフ形石器	(19)	1.0	0.5	1.0	水晶	先端部欠損・先端部衝撃剥離痕あり

常盤構内全景（西から）





(1) 調査区全景（北東から）



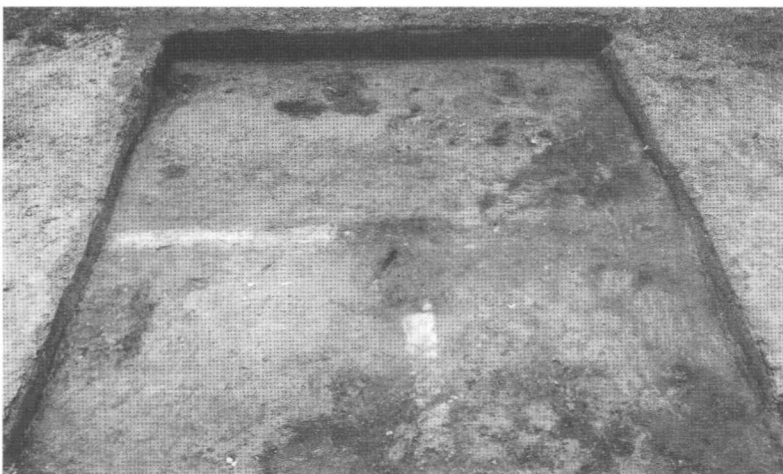
(2) 北拡張区完掘状況（南東から）



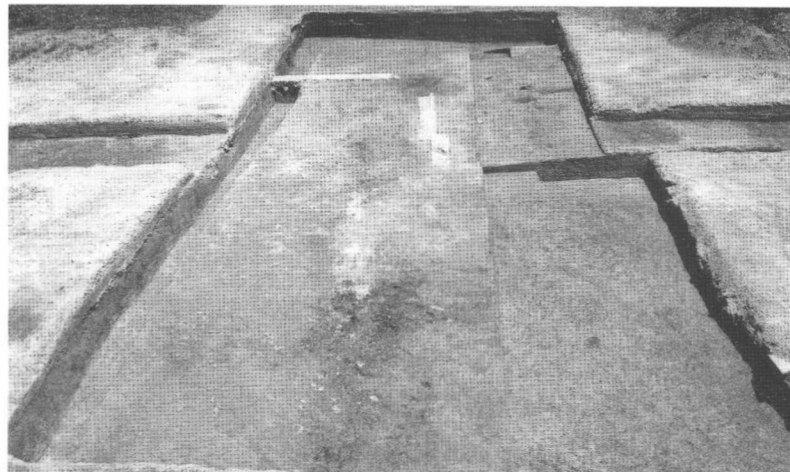
(1) 段状遺構土層 (AA'断面・東から)



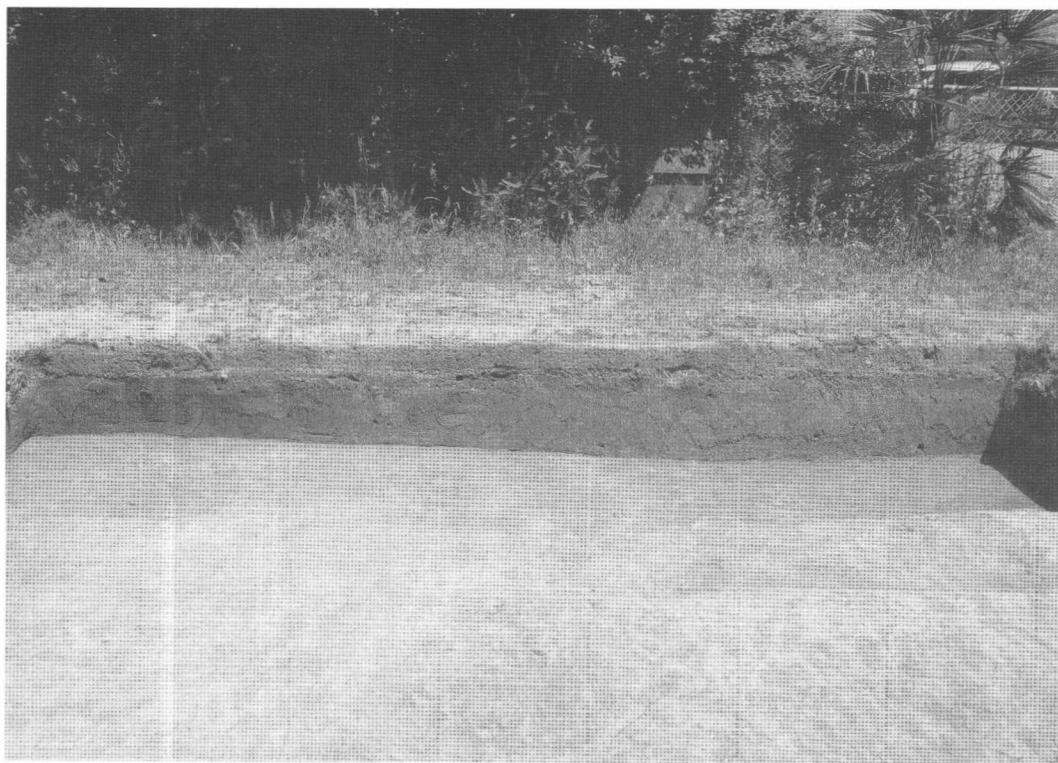
(2) 段状遺構完掘状況・北拡張区北西壁土層断面 (東から)



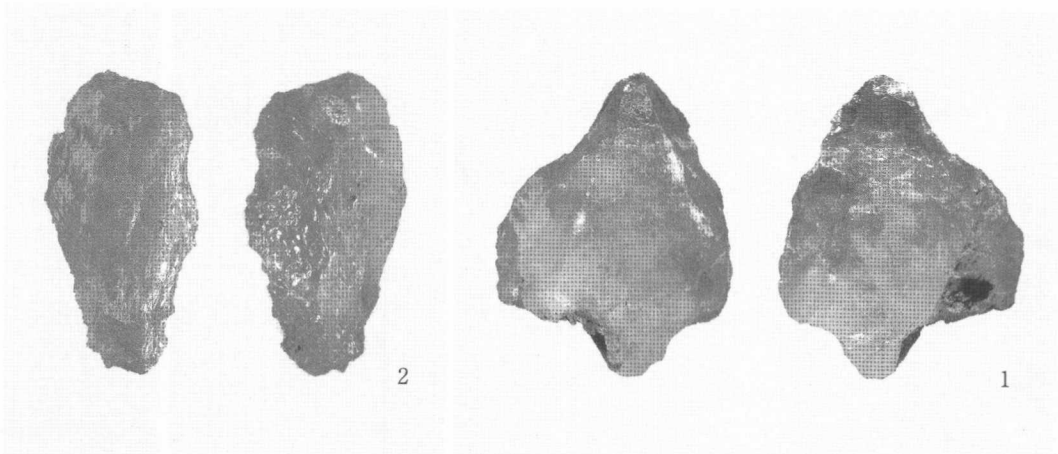
(3) 南拡張区南東半部第IV・V層上面検出状況 (北西から)



(4) 南拡張区完掘状況 (北西から)



(1) 南拡張区南東壁土層断面(北西から)



(2) 出土石器